# 非定形節における動詞移動の歴史的発達*

田　中　智　之

## 1. はじめに

本論文では、非定形節、特に分詞構文と動名詞構文における否定辞の分布について、歴史コーパスを用いて調査を行い、その歴史的発達を動詞移動の可否に関連付けて説明することを目的とする。分詞構文については Tanaka (2019) で提示されたデータと分析を基本的には踏襲するが、後期近代英語のコーパスとして The Penn Parsed Corpus of Modern British English, Second Edition (PPCMBE2; Kroch, Santorini, and Diertani (2016)) を使用することによりデータを拡充するとともに、動名詞構文について新たに調査を行い、分詞構文と動名詞構文における否定辞の分布について統一的説明を目指す。

現代英語の分詞構文と動名詞構文における否定辞の分布から議論を始める。まず、否定辞を伴う分詞構文では not が分詞の前に現れる。これは、(1) のような語彙的主語を伴わない自由付加詞構文、および (2) のような語彙的主語を伴う独立分詞構文に共通する特性である。

(1) a. Not working (much), Peter flunked.
　　b. *Working not (much), Peter flunked.

(2) a. My students not working at all, I'll fail them.
　　b. *My students working not at all, I'll fail them. (Pollock (1989: 408))

次に、否定辞を伴う動名詞構文では not が動名詞の前に現れる。これは語彙的主語の有無にかかわらず当てはまる特性である。

(3) a. John enjoyed not working on his vacation.
　　b. *John enjoyed working not on his vacation.

(4) a. Mary preferred Bill not going to the party.
　　b. *Mary preferred Bill going not to the party.

これに対して、初期英語の分詞構文では現代英語よりも否定辞の分布が自由であったことが報告されている。中村 (2006) は16世紀から20世紀に書かれた日記と書簡集から得られた分詞構文のデータに基づき、(1a), (2a) に見られる not が分詞に先行する語順（以下、not-V 語順）に加えて、not が分詞に後続する語順（以下、V-not 語順）が可能であったことを観察している。

(5) a. meeting not Mr. Sheply there, I went home

(1660 S. Pepys, *Diary*, I 261 / 中村 (2006: 57))

b. but she coming not, I went to her husband's chamber

(1669 S. Pepys, *Diary*, IX 461 / ibid.: 41)

中村の調査によれば、V-not 語順は17世紀までは生産的であったが、18世紀末までにほぼ消失し、not-V 語順に一本化された。

また、否定辞の分布と直接的な関係はないが、Visser (1966) における初期英語の独立分詞構文のデータを見てみると、分詞が語彙的主語に先行する語順が散見される。

(6) Seyng Iuly this fals fortunite, The soroes greate in hym so multiplied
Seeing July this false fortune the sorrows great in him so multiplied

(1464 Hardyng, Chon. B 37 / Visser (1966: 1154))

The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2; Kroch and Taylor (2000))、および The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME; Kroch, Santorini, and Delfs (2005)) を用いた Nakagawa (2011) の調査によれば、分詞が語彙的主語に先行する語順は後期中英語から16世紀にかけてある程度の頻度で観察される。

一方、中村 (2006) は分詞構文とは対照的に、動名詞構文では V-not 語順がほぼ皆無であることを指摘している。ごく稀にみられる V-not 語順は、以下のような助動詞 have/be や連結詞を伴う例に限られる。

(7) a. Having not used riding these three years, made me terrible weary; yet I resolve on Monday to sett out for Holyhead, as weary as I am

(1713 J. Swift, *Journal to Stella*, II 670 / 中村 (2006: 65))

b. many of my things are quite spoiled with mould, by reason of lying so long a-shipboard and my cabin being not tight (1660 S. Pepys, *Diary*, I. 226 / ibid.)

以下の Collins Wordbanks Online からの例に示されるように、そのような例は現代英語でも見られるため、動名詞構文における否定辞の分布は英語史を通じて変化していないと考えられる。Iatridou (1990) は現代英語の不定詞節に見られる同様の語順について、当該の否定辞は NegP に生起する文否定ではなく、後続する述語に付加されている構成素否定の not であると主張している。これが動名詞構文にも当てはまるならば、(7), (8) のような例において not はそれが修飾する vP や AP に付加されていることになる。[1)]

(8) a. If the children and the deceased didn't show up to vote, they would be counted as having not voted, driving down the turnout number. (Collins #225693496)

b. Jim's comment about me being not interested hurt me. (Collins #44895865)

これに対して、(5) の分詞構文の例では not に述語が後続していないので、not は構成素否定ではなく NegP に生じる文否定であると考えられる。Pollock (1989) 以降の生成文法理論の枠組みにおける標準的分析に従えば、動詞が not に先行する語順は T への動詞移動により派生される。また、動詞が主語に先行する語順については、現代英語における主語・助動詞倒置

（Chomsky (1986)）や初期英語の動詞第二現象（Kemenade (1987)）の標準的分析に従えば、Cへの動詞移動により派生される。

(9)　$[_{CP}$ C $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ T $[_{NegP}$ not $[_{vP}$ v $[_{VP}$ V … ]]]]]]

これが正しいとすると、(5), (6) のような例は、初期英語の分詞構文ではTへの動詞移動、およびCへの動詞移動が可能であったが、現代英語までに消失したことを示している。一方、動名詞構文では英語史を通じて動詞移動が不可能であるということになる。

以下では、分詞構文と動名詞構文における否定辞の分布に関する歴史コーパスから得られたデータを提示し、その調査結果を動詞移動の可否という観点から説明する。そして、Haeberli and Ihsane (2016) における極小主義理論に基づく動詞移動の分析を援用し、分詞構文と動名詞構文の構造変化が動詞移動の歴史的発達において重要な役割を果たしたと主張する。使用する歴史コーパスは、PPCME2, PPCEME, PPCMBE2である。[2)]

## 2．分詞構文

### 2.1.　データ

まず、歴史コーパスを用いて否定辞を伴う分詞構文の用例を収集し、否定辞と分詞の相対語順について調査した。調査結果は表 1 にまとめられており、各時期における not-V 語順と V-not 語順の実例数が示されている。[3)]

表 1 ：分詞構文における否定辞の分布（cf. Tanaka (2019: 5)）

| | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| not-V | 0 | 2 | 4 | 25 | 39 | 53 | 73 | 89 | 70 | 56 |
| V-not | 0 | 0 | 0 | 8 | 4 | 15 | 8 | 4 | 3 | 0 |

(10) に not-V 語順、(11) に V-not 語順の例をいくつか挙げる。

(10)　a.　sche　lay　stylle,　nowt　knowing　what　sche　mygth　best　thynke
she　lay　still　not　knowing　what　she　might　best　think
(CMKEMPE, 18.372: M4)

b.　Now Mr. Black Thomas not returning, the Gentleman that was o’recome with drink fell fast asleep,　(PENNY-E3-P2, 211.370: E3)

c.　Not feeling at first the Pain of the Stroke, he wondered what was become of the Ball,
(DODDRIDGE-1747–1, 10.72: L1)

(11)　a.　comfortand　noght　þam　þat　er　in　sorow,　or　in　sekenes,　or　in　povert,　or　in
comforting　not　those　that　are　in　sorrow　or　in　sickness　or　in　poverty　or　in

penance, or in pryson
penance or in prison (CMROLLEP, 99.569: M24)

b. An instrument whether it be a pipe or harpe maketh a distinction in the times and sounds, which distinction is well perceived of the hearer, the instrumente it selfe vnderstanding not what is piped or harped (HOOKER-A-E2-H, 6.66: E2)

c. and Nelson, losing not one of the critical moments which he had thus gained, made signal for his leading ships to weigh in succession (SOUTHEY-1813–1, 197.479: L2)

表 1 の調査結果より、M3までは否定辞を伴う分詞構文の頻度が低いものの、not-V 語順のみが可能であったことが分かる。その後、M4、すなわち15世紀前半に V-not 語順が出現し、初期近代英語ではある程度の実例数が見られるが、後期近代英語になると減少し、(11c) の例を最後に消失した。これは V-not 語順が18世紀中にほぼ消失したとする、前述の中村 (2006) の観察と一致する。したがって、分詞構文において、T への動詞移動は15世紀から18世紀まで許されていたと結論付けられる。[4)]

次に、前節で見たように、初期英語の独立分詞構文では分詞が語彙的主語に先行する語順が観察されるので、動詞移動との関係においてその歴史的発達を調査する必要がある。Nakagawa (2011) は PPCME2, PPCEME を用いて当該の語順を調査しているが、実例数が示されておらず、また後期近代英語がカバーされていないので、改めて 3 つのコーパスを用いて調査を行った。

表 2 ：分詞が語彙的主語に先行する独立分詞構文の分布（cf. Nakagawa (2011: 94, 96)）

| M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 0 | 10 | 10 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |

以下にいくつかの例を挙げる。

(12) a. For it is the herte and the myddes of all the world, Wytnessynge the philosophere þat seyth thus:
for it is the heart and the middle of all the world witnessing the philosopher that says thus (CMMANDEV, 1.7: M3)

b. In this firste yere of Kyng Henry the .iiii. yet lastyng the foresaid Parlyament vpon the Wednysday next folowynge the feest of Symonde and Iude the Lorde Morley appealyd the Erle of Salesbury of Treason (FABYAN-E1-H, 169R.C1.60: E1)

表 2 の調査結果より、分詞が語彙的主語に先行する語順は初期中英語ではほぼ皆無であり、その後 M3、すなわち14世紀中ごろに出現したが、E2、すなわち16世紀後半以降はほとんど観察されない。一方、Tanaka (2019) は PCEEC を用いて調査を行い、当該の語順が E1に19例、E2に11例見られることを報告している。そして、E2の11例のうち 8 例が1600年以降のテク

ストに収録されていることから、分詞が語彙的主語に先行する語順は17世紀前半まで可能であったと考えられる。したがって、分詞構文において、Cへの動詞移動は14世紀中ごろから17世紀前半まで許されていたと結論付けられる。

### 2.2.　分詞構文の構造変化

本節では、前節の調査により明らかとなった分詞構文における動詞移動の歴史的発達を分析するための基盤として、英語史における分詞構文の構造変化について考察するが、基本的にはNakagawa (2011) の提案に従う。Nakagawaによれば、中英語以降の分詞構文は機能範疇TとCを含む完全な節構造を持ち、独立分詞構文ではC-T構造形に基づき語彙的主語に主格が付与される（Chomsky (2008)）。以下では、中英語の分詞構文がCP構造を持っていたことを支持する3つの証拠を挙げる。

第一に、Nakagawa (2011) は以下の独立分詞構文の例を挙げ、虚辞のthereがTのEPP素性を満たすために [Spec, TP] に挿入され、分詞がそれに先行するCの位置に移動していると論じている。

(13)　the　xxviij　day　of　August …, beyng　there　thane　a　great　congregacion　of　poeple
　　the　28　day　of　August　being　there　then　a　great　congregation　of　people
　　(1424 Paston Lett. (Gairdner) I p. 13 / Visser (1966: 1161))

第二に、(14) はVisser (1966) における主格主語を伴う独立分詞構文の初出例であるが、そこでは目的語が主格主語に先行している。その目的語がCP領域への項前置によって主格主語の前に移動しているならば、独立分詞構文が14世紀中ごろまでにCP構造を持つようになったことを示唆する。

(14)　And　all　othyr　thyngs …　they　taking　in　euere　schope　that　they　fyndyn　defectyue
　　and　all　other　things　they　taking　in　every　shop　that　they　find　defective
　　(1345–6 Archives Comp. Grocers of London (ed. Kingdom) 120, 14 / Visser (1966: 1151))

第三に、特に近代英語において、以下のようなwh句を伴う分詞構文が観察される。Nakagawa (2011) はPPCEMEとThe Corpus of Late Modern English Texts (CLMET; Smet (2005)) を用いて調査を行い、そのような分詞構文は初期近代英語においてある程度の頻度で見られるが、L1に減少傾向となり、L3までにほぼ消失したことを報告している。

(15)　And then were seven Felons that received Sentence of Death; who being taken aside, Mr. Udall was called the second time　(JUDALL-E2-P2, 1, 177.376 / Nakagawa (2011: 97))

ここでは後期近代英語のコーパスとしてPPCMBE2を使用しているため、改めて3つのコーパスを用いてwh句を伴う分詞構文に関する調査を行った。調査結果は表3にまとめられているが、PPCME2ではデータが検出されなかったので、近代英語以降の実例数のみを示す。この調査結果はNakagawaの報告を裏付けるものとなった。[5)]

表 3 ：wh 句を伴う分詞構文の分布

| E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---|---|---|---|---|---|
| 19 | 67 | 32 | 27 | 7 | 2 |

この調査で見つかった大多数は、(15) のような wh 句が独立分詞構文の主語に対応する例であるが（154例中105例）、wh 句が目的語や PP に対応する独立分詞構文も見られる。

(16) a. by the smell of the Carrots the Sow followed him, which the Old Woman spying, she cry'd out, Come hither Mistris Bride, (PENNY-E3-P2, 203.300: E3)

b. and on the sodaine within two hours after dyed; of whom the sexton telling, hee was buried there indeed. (ARMIN-E2-P1, 25.348: E2)

さらに、以下の例では自由付加詞構文に wh 句が生起しており、独立分詞構文だけでなく自由付加詞構文も CP 構造を持っていたことを示している。

(17) a. and on it, observing the place where several of these Sparks seemed to vanish, I found certain very small, black, but glistering Spots of a movable Substance, each of which examining with my Miscrocope, (HOOKE-E3-H, 44.9: E3)

b. And Moses put them before the Lord, in the Tent of the Testimony. Into which going the next Day, (PURVER-OLD-1764–1, 17, 1N.593: L1)

ここでの調査では中英語の例は見つからなかったが、以下の例が Visser (1966) に引用されており、wh 句を伴う分詞構文は14世紀後半に既に存在していたことが分かる。したがって、分詞構文がこの時期までに CP 構造を持つようになったことを支持する。

(18) A Preost … seide in game 'Why chese ȝe nouȝt me myself?' whos gaume
a priest said in game why choose you not me myself whose game
oþere nouȝt takynge gamfully,
other not taking gamely (c1387 Trevisa, Higden 7, III / Visser (1966: 1154))

Nakagawa (2011) は wh 句を伴う分詞構文の衰退の証拠に基づき、後期近代英語の L1、すなわち18世紀中に CP 領域が失われ始め、C-T 構造形の下で主格主語が認可される独立分詞構文が衰退したと分析している。一方、頻度は低いものの独立分詞構文は現代英語でも見られることから、分詞構文が CP 領域を持つという選択肢は19世紀以降もわずかながら存続していると考えられる。以上の議論から、分詞構文の構造変化は以下のようにまとめられる。

(19) a. $[_{CP}$ C $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ T $[_{vP}$ v $[_{VP}$ V-*ing* … ]]]]] （14世紀中ごろ～18世紀）

b. $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ T $[_{vP}$ v $[_{VP}$ V-*ing* … ]]]] （19世紀～）

### 2. 3. 分詞構文における動詞移動の歴史的発達

本節では、Haeberli and Ihsane (2016) で提案された一致に基づく動詞移動の分析を一部修正

し、分詞構文における動詞移動の歴史的発達を説明する。Haeberli and Ihsane は動詞移動に関わる機能範疇は値未付与のＶ素性（以下、[uV]）を持ち、動詞と一致関係を結ぶことにより [uV] が値付けされると提案している。そのような機能範疇が 1 つのみの場合、それが EPP 素性を持つ場合には動詞は機能範疇に移動するが、EPP 素性を持たない場合には元位置に留まる。次に、[uV] を持つ機能範疇が複数ある以下のような事例について考察する。

(20)　… $F1_{[uV]}$ … $F2_{[uV]}$ … V …

F2が併合された時点で F2はＶと一致関係を結び、[uV] が値付けされる。Haeberli and Ihsane は、F2の値付けされたＶ素性がＶと [uV] を持つ上位の機能範疇、ここでは F1の一致関係に介在すると仮定している（Chomsky (2000)）。このような場合、Ｖは F2に移動することにより F1までの距離が F2と同じになるので、一致関係の下で F1の [uV] に値付けすることが可能となる。もし F1が EPP 素性を持つならば、さらにＶは F1に移動する。(20) においてＶの F2への移動は今述べた局所性の制約により駆動されるため、ここでは F2は主要部移動を駆動する EPP 素性を持たないと仮定する。これが Haeberli and Ihsane の分析と唯一異なる点である。

Haeberli and Ihsane は定形節における動詞移動のみを論じているが、TP 領域の機能範疇が [uV] を持つか否かは、時制、相、法を表す動詞屈折の存在により決定されるとしている。すなわち、[uV] を持つ機能範疇は動詞と一致関係を結ぶことにより、動詞の屈折を認可することになる。一方、CP 領域の機能範疇に関係する動詞屈折はないので、[uV] および EPP 素性の有無は形態的証拠ではなく統語的証拠、具体的には主語・動詞倒置の存在により決定される。このような枠組みにおいて、分詞構文を構成する機能範疇が [uV] および EPP 素性を持つか否かを検討する必要がある。Reuland (1983) は、現代英語の分詞構文における -ing 接辞は IP の主要部を占めていると仮定している。これを一致に基づく分析の下で捉え直すと、分詞構文におけるＴは [uV] を持ち、動詞との一致関係の下で -ing を認可するということになる。一方、分詞構文は非定形であるので、Ｃが [uV] および EPP 素性を持つという選択肢は有標であり、定形節における主語・動詞倒置の存在に依拠するため、その有無は定形節との類推により変動すると仮定する。

以上の議論を念頭に置き、分詞構文における動詞移動の歴史的発達について考察する。前節で論じたように、14世紀中ごろに分詞構文は機能範疇ＣとＴを含む構造を持つようになったが、この時期には定形節において動詞第二現象が頻繁に観察される。動詞第二現象では動詞がＣに移動し、[Spec, CP] を占める第一構成素に後続する位置に現れると分析される（Kemenade (1987)）。したがって、この時期の分詞構文はＴのみが [uV] を持つ無標の選択肢に加え、定形節との類推により、Ｃが [uV] と EPP 素性を持つ有標の選択肢も利用可能であったと考えられる。そして、ｖの接辞としての特性によりＶがｖに移動するという、Chomsky (1995) 以降の標準的仮定を採用すると、14世紀中ごろ以降の分詞構文の構造は以下のようになる。

(21)　14世紀中ごろ～

a. $[_{CP}$ C $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]]

b. $[_{CP}$ $C_{[uV]\ [EPP]}$ $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]]

(21a) ではVはvの位置に留まりTと一致関係を結び、TPとvPの間に投射されるNegPに後続するため、not-V語順のみが可能となる。一方、(21b) ではV-vはCのEPP素性を満たすためにTを経由してCに移動するため、分詞が語彙的主語に先行する語順がこの時期に出現したという事実が説明される。

Kemenade (1987) によれば、動詞第二現象は14世紀後半から15世紀初頭にかけて衰退し始めた。これはCのEPP素性が失われ始めたことを意味するが（Haeberli and Ihsane (2016)）、それによりCが [uV] のみを持つ (22c) の選択肢が新たに利用可能になったと仮定する。

(22) 15世紀〜

a. $[_{CP}$ C $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]] (= (21a))

b. $[_{CP}$ $C_{[uV]\ [EPP]}$ $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]] (= (21b))

c. $[_{CP}$ $C_{[uV]}$ $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]]

(22a, b) に基づく派生は (21) と同じなので省略するが、新たな (22c) の構造により、分詞構文におけるTへの動詞移動の出現が説明される。(22c) においてTがvPと併合された時点で、TとVは一致関係を結び、Tの [uV] が値付けされる。もし仮にVがvの位置に留まったとしたら、値付けされたTのV素性がCとVの間に介在することになる。したがって、Cの [uV] が値付けされるためには、V-vはTの位置まで移動しなければならない。Tへの動詞移動によりV-not語順が派生されるので、この語順が15世紀に出現したという事実が説明される。[6)]

動詞第二現象の消失により新たな局面を迎える。Fischer, et al. (2000) はJacobsson (1951) などのデータに基づき、動詞第二現象は16世紀に一旦頻度が上昇したものの、17世紀に最終的な消失に向かったと述べている。これにより、Cへの動詞移動を可能にする (22b) の構造が失われ、2つの選択肢のみが残された。(22b) の構造が利用不可能となったため、Cへの動詞移動、すなわち分詞が語彙的主語に先行する語順が17世紀前半に消失したことが説明される。一方、(22c) の構造によりV-not語順が派生されるため、この時期にはまだTへの動詞移動は可能であった。

(23) 17世紀〜

a. $[_{CP}$ C $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ V … ]]]]] (= (22a))

b. $[_{CP}$ $C_{[uV]}$ $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ … ]]]]] (= (22c))

前節で見たように、18世紀になると分詞構文はCP領域を失い始め、19世紀以降はTPのみからなる構造が優位となった。この変化により分詞構文の構造は以下の1つのみとなった。(ただし、CP領域を持つという選択肢もわずかながら存続していることに注意すべきである。)

(24) 19世紀〜

$[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ $T_{[uV]}$ $[_{vP}$ V-v $[_{VP}$ V … ]]]]

この構造においてTはvの位置を占めるVと一致関係を結ぶことができる。したがって、分詞構文において動詞のTへの移動、すなわちV-not語順が18世紀中に消失したことが説明される。

## 3．動名詞構文

### 3.1.　データ

歴史コーパスを用いて否定辞を伴う動名詞構文のデータを収集し、否定辞と動名詞の相対語順について調査した。調査結果は表3にまとめられているが、PPCME2ではデータが検出されなかったので、近代英語以降の実例数のみを示す。

表4：動名詞構文における否定辞の分布

| | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| not-V | 2 | 16 | 34 | 41 | 66 | 47 |
| V-not | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |

(25) にnot-V語順、(26) に唯一見つかったV-not語順の例を挙げる。

(25) a. he had been formerly impatient for not atteyning to the full degrees of his desires and hopes, (HAYWARD-E2-H, 4.12: E2)

b. She is very kindly inquired after by her friends here, who all regret her not coming with her father and mother (AUSTEN-180X-1, 189.658: L2)

(26) As it is absolutely & confessedly impracticable for you to go, there would, I feel, be almost an impropriety in my being not the representative of both Parents but of you only (COLERIDGE-1825–2, 5, 502.44: L2)

表1で見た分詞構文とは対照的に、動名詞構文では1例以外はすべてnot-V語順となっており、中村 (2006) の調査結果と一致している。そして、その1例である (26) は連結詞を伴うため、notは後続する述語に付加されている構成素否定であると考えられる（1節の議論を参照)。したがって、動名詞構文では英語史を通じて動詞移動が不可能であると結論付けられる。

### 3.2.　動名詞構文の構造変化と動詞移動の可否

よく知られているように、もともと名詞的範疇であった動名詞は中英語以降に動詞的特性を獲得した。例えば、Fanego (2004) は動名詞構文が1200年ごろに副詞と共起するようになり、1300年ごろにofを介することなく目的語を取るようになり、15世紀前半に受動のbe、16世紀後半に完了のhaveと共起するようになる、という歴史的発達を概観している。以下が直接目的語を従えている動名詞構文の例であるが、1300年ごろに対格を認可するvを含む構造を持

つようになったことを示している。

(27) Sain Jon was … bisi In ordaining of priests, and clerkes, And in casting kirc werkes
'Saint John was … busy ordaining priests and clerics, and in planning church works'
(c1300 (MS a1400) English Metrical Homilies 112/2–4 / Tajima (1985: 76), Fanego (2004: 6))

2.2節の分詞構文の構造変化に関する議論において、虚辞の there の生起が TP 構造の証拠となることを見たが、Visser (1966) における虚辞の there を伴う動名詞構文の初出は以下の例であるため、動名詞構文は17世紀中ごろに TP 構造を持つようになったと考えられる。

(28) Epicurus and his scholars of old … make this an argument of there being no God
(1657–83 John Evelyn, Hist. Religion (1850) I, 79 / Visser (1966: 1185))

一方、分詞構文とは異なり、項前置や wh 移動、および語彙的主語に動詞が先行する語順など、CP 領域の存在を示す証拠は動名詞構文には見られない。したがって、動名詞構文の構造変化は以下のようにまとめられる（cf. 平田（近刊））。

(29) a. $[_{vP}$ Subj $[_{v'}$ v $[_{VP}$ V-*ing* … ]]]（14世紀〜17世紀中ごろ）
b. $[_{TP}$ Subj $[_{T'}$ T $[_{vP}$ v $[_{VP}$ V-*ing* … ]]]]（17世紀中ごろ〜）

(29a) は機能範疇を含む節構造ではないため、そこに生じる否定辞は構成素否定の not であると考えられる。この構造に生じる not が v′ に付加されていると仮定すると、not-V 語順のみが可能となる。17世紀中ごろ以前の not-V 語順の分布を見てみると、18例中15例が語彙的主語を伴わない動名詞構文、または (30) のような所有格主語を伴う動名詞構文である。後者の動名詞構文が vP の上位に DP を含むとすると、これら多数派の例では not が vP に付加されていると考えることもできる。

(30) My deere Harte the cause of my not writing to thee the last week was becaus I thought to haue been at home with the before my letter, (KNYVETT-1620-E2-H, 55.18: E2)

2.3節の分詞構文における動詞移動の議論において、動詞がCの [uV] を値付けするためには、局所性の制約により V-v が T に移動しなければならないことを見た。そして、CP 領域を失った後は、動詞は v の位置に留まり、T の [uV] と一致関係を結ぶことを論じた。このように、T への動詞移動はCの [uV] により駆動されるため、CP 領域を持たない動名詞構文では V-not 語順は派生されず、英語史を通じて not-V 語順のみが可能であることが説明される。[7)]

## 4．結語

本論文では、歴史コーパスを用いて分詞構文と動名詞構文における否定辞の分布を調査し、その調査結果を動詞移動の可否という観点から、両構文の構造変化と関連付けて説明することを試みた。分詞構文は14世紀中ごろに CP 構造を持つようになったが、その結果、Cへの動詞移動により分詞が語彙的主語に先行する語順が出現した。そして、15世紀に動詞第二現象

が衰退し始めるとTへの動詞移動が可能となり、分詞構文においてV-not語順が出現したと主張した。その後、18世紀中に分詞構文がCP領域を失ったことにより、V-not語順が消失したことを論じた。一方、動名詞構文は英語史を通じてCP構造を持たないので、not-V語順のみが許されることを示した。

## 注

* 本論文は科学研究費助成事業（基盤研究(C) 課題番号17K02808）の研究成果の一部である。

1）Pollock (1989) によれば、現代英語の分詞構文においても同様の語順が容認可能である。

(i) ? Being not interested in syntax, Peter works in phonology. (Pollock (1989: 408))

また、以下にCollins Wordbanks Onlineで見つかった実例を挙げる。

(ii) a. Ten weeks went by and one of my credit card companies called to say I was about to go into default, having not paid for months. (Collins #174337754)

b. Or perhaps the clouds we see are among the few that have remained on the brink of making stars, being not quite dense enough. (Collins #137527874)

ここでは、これらの例におけるnotも構成素否定であり、後続するvPまたはAPに付加されていると仮定する。

2）本論文では、古英語と初期中英語の分詞構文と動名詞構文については議論しない。古英語と初期中英語の独立分詞構文の語彙的主語は、それぞれ与格と目的格で標示されるが、後期中英語に出現する主格主語を伴う独立分詞構文との連続性が明らかではなく、研究者の間で意見が分かれている（Visser (1966)）。分詞構文におけるCへの動詞移動の証拠は独立分詞構文に基づくため、ここでは、主格主語を伴う独立分詞構文が出現した後期中英語以降のみを議論の対象とする。また、古英語と初期中英語の動名詞構文はまだ名詞的範疇であり、否定辞と共起する可能性はないため、本格的に動詞的特性を獲得し始める後期中英語以降のみを考察する。

3）PPCME2, PPCEME, PPCMBE2の時代区分は、M1 (1150–1250), M2 (1250–1350), M3 (1350–1420), M4 (1420–1500), E1 (1500–1569), E2 (1570–1639), E3 (1640–1710), L1 (1700–1769), L2 (1770–1839), L3 (1840–1914) である。

4）以下はThe York-Helsinki Parsed Corpus of Early English Correspondence (PCEEC; Taylor, Nurmi, Warner, Pintzuk, and Nevalainen (2006)) からのV-not語順の例であるが、そこでは代名詞目的語がnotに先行しており、現代スカンジナビア言語で観察される目的語転移と同様の語順を示している。

(i) Kyng Richard, in his most best tyme, and the first yere of his reigne, having you not in the favor of his grace, but utterly against you, caused them to have a parte of your lands by his award and ryall power, contrary to your agreement and all right conscience; the which I trust to God will be called againe (PLUMPTO, 122.055.845: M4)

一般に、目的語転移は語彙動詞がvPの外部に移動する場合にのみ適用可能であると仮定されているので（Holmberg (1986)）、(i) のような例はV-not語順がTへの動詞移動により派生されるとする、ここでの分析の証拠となる。

5）Nakagawa (2011) によれば、現代英語においてごく稀ではあるが、wh句を伴う分詞構文が観察される。しかし、そのような例の頻度は極めて低いので、事実上廃用となっているようである。

(i) Robert Southey, who said that Isaac D'Israeli looked like a Portugee, who being apprehended for an assassin, is convicted of being circumcised. (brbooks BB-YM042731 / Nakagawa (2011: 100))

表3におけるL3の2例は同じテクストに収録されていることから、L3までに現代英語と同じく極めて限定的な使用状況になったと考えられる。

6）Fischer, et al. (2000) によれば、Richard Rolle は動詞第二現象の衰退が始まった最初期のテクストであるが、興味深いことに、同じテクストにおいて V-not 語順が観察され始めている（cf. (11a)）。したがって、この事実は V-not 語順の出現を動詞第二現象の衰退と関連付ける、ここでの分析を支持するものである。

7）驚くべきことに、PCEEC において語彙動詞が not に先行する以下の動名詞構文の例が見つかった。

(i) ye wole find þe meane to my lord Chaunceler as to excuse my lord of his coming not
you will find the means to my lord Chancellor as to excuse my lord of his coming not
to London at þis time,
to London at this time (STONOR, I, 117.020.304: M4)

これは、否定辞を伴う動名詞構文が PPCME2 では見つからなかった後期中英語の例であり、極めて例外的であると思われるが、その扱いについては今後の課題としたい。

## 参考文献


Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freiden, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.

Fanego, Teresa (2004) "On Reanalysis and Actualization: The Rise and Development of English Verbal Gerunds," *Diachronica* 21: 1, 5–55.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Haeberli, Eric and Tabea Ihsane (2016) "Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English," *Natural Language and Linguistic Theory* 34, 497–542.

平田拓也（近刊）「対格主語動名詞の史的発達に関する一考察」*JELS* 38.

Holmberg, Anders (1986) *Word Order and Syntactic Features in the Scandinavian Languages and English*, Doctoral dissertation, University of Stockholm.

Iatridou, Sabine (1990) "About Agr(P)," *Linguistic Inquiry* 21, 551–577.

Jacobsson, Bengt (1951) *Inversion in English: With Special Reference to the Early Modern English Period*, Almqvist and Wiksell, Uppsala.

Kemenade, van Ans (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Nakagawa, Satoshi (2011) "Synchronic and Diachronic Aspects of Nominative and Accusative Absolutes in English," *Gengo Kenkyu* 139, 85–109.

中村不二夫 (2006)「Not 後置型 -ing 形の衰退―助動詞 do の発達の隠れた側面 (1) 16–20 世紀日記・書簡資料を根拠に」『愛知県立大学文学部論集（英米学科編）』55, 41–86.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365–424.

Reuland, Eric (1983) "Governing *-ing*," *Linguistic Inquiry* 14, 101–136.

Tajima, Matsuji (1985) *The Syntactic Development of the Gerund in Middle English*, Nan'un-do, Tokyo.

Tanaka, Tomoyuki (2019) "The Loss of Verb Movement in Participial Constructions," *Linguistics and Philology* 38, 1–18.

Visser, Frederikus (1963–73) *An Historical Syntax of the English Language* (4 vols), E.J. Brill, Leiden.

## コーパス

*Collins Wordbanks Online*

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Smet, Hendrik (2005) *The Corpus of Late Modern English Texts* (CLMET), University of Leuven, Belgium.

Taylor, Ann, Arja Nurmi, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Terttu Nevalainen (2006) *The York-Helsinki Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC), University of York, York.

キーワード：分詞構文、動名詞構文、否定辞、動詞移動、動詞第二現象

**Abstract**

The Historical Development of Verb Movement in Nonfinite Clauses

Tomoyuki Tanaka

This paper investigates the distribution of negation in participial and gerundive constructions by employing historical corpora, and attempts to account for its historical development by relating it to the possibility of verb movement. It is revealed that participial constructions had verb movement to T and C in early English, exhibiting the configuration in which the participle precedes the negative *not*, as well as that in which the participle precedes the lexical subject in the absolute construction. It is argued that participle constructions came to have a full-fledged clause structure involving T and C in the mid-fourteenth century, which made possible verb movement to C by analogy with finite clauses featuring verb second. Then, the decline of verb second is shown to be responsible for the rise of verb movement to T under the minimalist analysis of verb movement proposed by Haeberli and Ihsane (2016). As participial constructions lost the CP layer in the eighteenth century, verb movement to T became impossible because it was triggered by the unvalued V-feature carried by C. Finally, it is claimed that verb movement has not been attested in gerundive constructions that have never developed the CP layer in the history of English.

Keywords: gerundive construction, negation, participial construction, verb movement, verb second